

## 万葉のふるさと奈良

西村 典子

あをによし奈良の都——かつての王城の跡を、梅雨の晴れ間をぬって私たちは訪れた。近鉄西大寺駅から一条北大路を東へ、秋篠川を渡ってすすむ。何の変哲もない日本のいなか風景であるが、道端の藁葺屋根の質素な民家は、〃宮材引く泉の杣に立つ民の息ふ時無く〃働いた人々の歴史を物語っているかのようであった。

十五分ほど歩くと、北側にこんもり茂った平城天皇陵が目に入る。ちょうどその南側一帯が平城宮址である。この地は訪れる人も稀なようで、私たちが訪れた時も大極殿跡の大きな松一本が、平城の都へと私たちを導いてくれた。

大極殿の土壇に立ち南を望むと、広い宮址の一面茫茫たる雑草の原が目に入る。〃

立ちかはり古き都となりぬれば、道の芝草長く生ひにけり〃恭仁京遷都のあとの荒廃を、芝草の一本一本が今なお象徴しているかのようであった。

〃あをによし奈良の都は、咲く花の匂ふが如く今盛りなり〃この地の自然の美しさは、決して太宰ノ少弐小野ノ老一人の美しさではなかった。〃さすだけの大宮人の踏み鳴し通ひし道〃を歩いてみる。いつしか千年という時の流れを忘れ、天平の夢に浸る私たちである。それも束の間、宮址の一面を横切る電車の轟音に、私たちは現実を引き戻されてしまった。もうそこには荒廃をうたった芝草はなく、どこにもかしこにもあるような雑草だけが目に入る。

天平の夢から覚まされた私たちは、宮址の東方に位す尼寺法華寺へと向う。閉ざされていた扉が尼僧によって恭しく開かれ、私たちは本堂に入り拝観す。十一面観音像をはじめとする霊像名宝のわずかが、仰ぎ見られる。かずかずの像の中にあつて、平家物語・源平盛衰記にみられ、樗牛全集の滝口入道に面白く描かれているところの

横笛の像は、尼寺であるこの寺にいかにもふさわしい像であった。滝口入道との間に交わされた文でもって自作したといわれるこの像。横笛の心持が、ひびいてくるようであった。

法華寺の拝観を終え、バスで奈良市内に入り、万葉植物園へと向う。途中鹿の歓迎攻めに会う。〃ももしきの大宮人は、暇あれや、梅をかざして、茲に集へる〃大宮人たちの絶好の遊楽逍遙の地であったここ春日野一帯。木の茂みがやや深くなったところには万葉植物園はあつた。古代人がさまざまなおもいを託してうたった万葉の草花。それらの一本一本には、万葉の歌人たちのおもいがいきづいていくかのようであった。

万葉の歌の素朴さを味わうべく訪れた今回の文学散歩であったが、かけ足でまわったため素朴さに浸りきることもできなかった。もう一度訪れる機会があれば、ゆっくりと歩いて、のびのびした万葉のムードを味わい、古代人の息吹きにふれてみたいものである。(国三)